

また学習園で咲かせたい！バックヤードの植物たち

「前は学習園にあったのに、最近はないなあ…」という植物、思い浮かぶ方も多いのではないかと思います。中には絶えてしまったものもありますが、多くはバックヤードに引き上げたり、植栽場所を変えたりして絶やさないように管理しています。今回は伊豆諸島ゾーンの植物を例に、今はバックヤードで過ごしている植物たちと、管理の課題や工夫をご紹介します。



短命のため維持が難しい植物

ママコノシリヌグイ（タデ科）

ママコノシリヌグイのような「一年草」は、学習園での維持が難しい植物のひとつです。一年草の多くは春に発芽し、その年の冬には種子を残して枯れてしまうという生活サイクルです。学習園が種子や幼苗の生育に適した環境であれば、放っておいても発芽～結実し、例えばエノコログサ（イネ科）は特別なケアをせずとも絶えません。

しかし、地形上、土壌中の水分に乏しい学習園は、湿り気のある土壌を好むママコノシリヌグイにとっては生育に適した場所とはいえません。去年はじめて植栽しましたが、今は枯れ、子孫の種子が数個あるのみです。この種子が春に発芽してくれることを期待していますが、一年草の維持はなかなか難しく、思うようにいきません。

ハマナデシコ（ナデシコ科）

ハマナデシコのような一回繁殖型（一回開花性）の植物は、「去年はたくさんあったのに、今年は減ってしまった」と感じる年があります。一回繁殖型の植物は、数年かけて生長しますが、開花までの年数が一定でないため、年によって開花数の変動が大きいのです。また、一年草と同じく花が咲いたら種子を残して枯れてしまいます。

幸い、ハマナデシコはたくさん種子ができ、発芽率も高く、幼苗も丈夫で、毎年後継株をつくることのできています。バックヤードでは、たくさんの苗が春の植栽シーズンを待っています。



近年の気候変化の影響を受けた可能性のある植物



ネコノシタ (キク科)

ネコノシタは開設当初から 2022 年まで海岸砂地エリアに植栽されていきました。常緑ですが、調布の冬は寒いので冬は地上部が枯れてしまいます。それでも初夏になると再び芽を出し、株張り 50 cm ほどに育って花を咲かせていました。しかし、2022 年から芽が出なくなってしまい、補植しても根付かず、学習園での維持が難しくなっていました。

冬の寒さのダメージに加え、生育期であった 6 月～10 月の気温・地温が近年高くなりすぎたことが大きな要因ではないかと考えています。株数も少ないので、今はバックヤードで養生しています。



ハマアザミ (キク科)

ハマアザミも海岸砂地エリアの植物です。園地のみで管理していましたが、年々株が小さくなっていったため、去年は園地の全 2 株をバックヤードに引き上げました。花を咲かせて種子をとり、順調に 10 株発芽しています。

伊豆諸島ゾーンは、冬は学習園で最も寒く、夏は学習園で最も暑くなります。伊豆諸島や海岸の植物は冬の凍結が致命的になる種が多いですが、暑さには比較的強いので、これまでは冬越しが課題でした。しかし、近年の東京の猛暑は、そんな植物たちにも適応できない温度になりつつあるように感じており、今後がとても心配です。



バックヤードに引き上げた植物は、株が大きくなったり、株数が増やせたりしたら、園地に戻す試みもしています。

調子を崩していたため 2020 年にバックヤードに引き上げていたイワタイゲキ (トウダイグサ科) を、昨年久しぶりに海岸岩地エリアに植栽しました。元々土質が悪かったので、土壌改良を行ってから試験的に植栽してみたところ、今のところ元気に育っています。花が咲くかはまだわかりませんが、期待して春を待ちたいと思います。

